

1、 「こぎん刺し」との出会い

昨年春、奈良大宮の小さな「ギャラリー風と心」に阿部さんという夫婦連れが来て店主の町中さんと暫く話をして帰ったが、実はこの人、東北石巻から奈良へ研修に来ていて『東北大震災』となり、帰る家を失って思案していたところだったという。

励まされて帰郷した阿部さんが見つけたのが廃墟の泥の中の「こぎん刺し」。

「こぎん刺し」とは青森県津軽に伝わる刺し子技法で、木綿布の紺に白糸の幾何学模様が作り出す素朴な味わいのもの。これを仮設住宅で刺し始めたところ、共鳴者が大勢参加するようになり、出来上がった作品を「ギャラリー風と心」に送ってきたという。



手のひらに乗る小さな「巾着袋」もあれば、大きめな壁掛けもある。思い掛けぬ縁が展示会となり、奈良の新聞にも掲載され新聞は石巻にも送られた。不思議な出会い。

これを参観に行った我々にも別の出会いがあった。店主が「どちらから？」と問うので「清水から」と答えると、横のご婦人が「エェッ！ 私、清水に居ました」という。

蒲原町に生まれ、蒲原中から清水西高に学び、音楽は山田茂先生に習った。奈良に嫁いできているが、先般、同級会があって清水へ行って来たとのこと。

不思議な出会いが生まれる「ギャラリー風と心」である。



2、 弔 堀田哲爾君のこと

堀田哲爾君が亡くなったと知らされた。もう二カ月以上も前のことだという。知らぬことだったが、葬儀に参列もできず残念だった。謹んでご冥福を祈る。

彼と私は大学の同級である。専攻が異なり家も離れていたが、アルバイトが一緒だったので仲は良かった。卒業後、彼が江尻小、私が有度小に勤務するようになり、若手教員の行事などで協力しあうことが多かったが、その一つ“白樺湖スキー楽しみ会”に行ったときのこと。最初に滑った彼が雪の中で倒れて、尾てい骨を骨折。

医師がいないので雪で冷やすしかなかったが、懸命に徹夜で看護したのが、同行した「高橋佳美」さんで後の堀田夫人。彼女も同級生で浜田小勤務である。

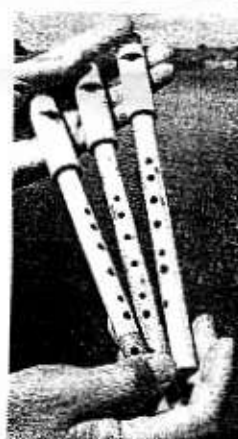
一般には「蹴球」と言われていたサッカーを、懸命に清水の地に育てたのは彼だが、これも専門違いで、私は子供時代は草野球、大人になってからは排球・バレーである。その私が一度だけサッカーをしたことがある。一中校庭に夜間照明が出来た時、堀田君が見物席の私に「親善試合に出ろ」と言い、「ボールに触ったことも蹴ったこともなし」と断ったのに「ボールが来ないところに居ればよい」と無理やりに参加させた。

味方が攻撃中はよいが、攻め込まれたら大変。敵のFWに散々に体を蹴られた。彼曰く「サッカーは格闘競技だ。蹴られたら蹴り返せ。そのくらいは出来るだろ」

彼と最後に話したのは七中だった。『草薙神社の龍勢由来』の立て札を筆で書いていた私に、近付いてきた彼が何か言った。内容は覚えがない。佳美さんは元来は音楽人である。いつだったか「わたしサッカー未亡人よ」と言われたことが思い出される。



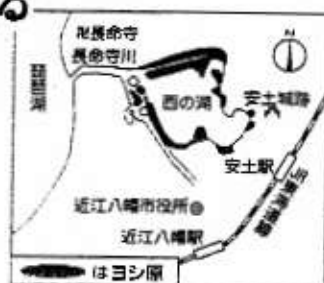
3、 琵琶湖畔「ヨシ笛」の会 訪問 9/5記



一本一本音色が異なる



西の湖でコンサート



琵琶湖のヨシ（葦・アシ）を使った面白い笛を吹く人達がいると聞き、まずは琵琶湖博物館に尋ね、教えられて菊井了さんと近藤ゆみ子さんに面会した。

ヨシ笛は自然を活かした楽器である。製作にまつわる苦労話を伺ったが、私がリコーダーの関係者であることからリコーダーに関する質問も多かった。ドイツ笛とバロック笛との違いなどである。 *近江の囃子*

肝心のヨシ笛の音色を聞くため、駅から相当離れた「西の湖」まで案内される。葦が採れるところであり申し分のない舞台設定だが、風が吹いてヨシ笛の音が吹き飛ばされて笛が風に負けてしまう。難しい。

帰りの電車の中でヨシ笛を思っ創作(試作)をする。自然を活かす和声とし、複旋律的な試作である。

何という狂気じみた悲しい話だろうか。この数日のデモの狂乱のことである。

未熟な若者の騒ぎかと思っていたら、他人の物を破壊し、強奪するのを治安担当者が制止どころか、奨励し、垂れ幕から衣装・プラカードまでも用意する。武装警察も「見るだけ」。それどころか、外交スポークスマンは「他国のせい」と言い張り、国を代表する者が愚かな発言をする。国全体が狂気を呈していると思えない。

事の本質は覇権主義と領土拡張、それを支える軍事誇示であろう。これまで他国を「帝国主義」などと誹謗していたのが、時代や立場が変われば、別の因縁をつけて己の拡張を図り、他国の平和を侵害してでも自国の野望を遂げようとしているようだ。

私が長い友好活動で知り合った多くの友人たちはどうしているのだろうか。同じように狂って石を投げ建物や車を壊し、人の物を盗んでいるのだろうか。見たくない姿である。

静岡・清水の小中学校では10月に音楽会が催される。←(中止)通知(一方的)あり 1/4
文化活動であり、国際交流教育であると期待していたが、学校長は何と言って来演者たちを紹介するのだろうか。

子供たちだって毎日繰返される「世にも不思議な乱暴」をTVで見ているはずである。

本年は友好交流の記念の年として多くの交流活動が企画されていた。既にその多くが取り消しとなり汚点を付けているが、今後はどのようにして握手をする気だろうか？

これらを乗り越え友好活動を続けるのは極めて難しい。

覇権を封じ、失政を詫び、損害賠償すべきだと思ふ。

(言)



難波宮の所在

以前、「どこにあるのか」と疑問を呈した『難波宮』は大阪城のすぐ南にありました。(上の地図を参照)大化改新の孝徳天皇と大仏を造った聖武天皇の都だったというが、発見されたのは昭和36年。今では毎年9月15日に中国人が「中秋名月」の会を催して、友好交流で賑やか。デモなんて狂人のすることだと…言ってるそうです。

5. マンザイはお好きですか

最近、面識を得た方(女性)が「落語は好きですか？」と私に聞く。以下はその会話。「エエ志ん朝や志ん生をよく聞きますよ」「イエ、昔の名人じゃなくて、出演する落語家は若手一人、あとは漫才ばかりですけど、お好きなら入場券を差し上げようと思ひまして」「ウム、漫才ですか。私は関東育ちのためか漫才の会話が理解できないんですよ」「アラ、実は私も判らないんです」「でも、TV会場では大勢爆笑してますよね」「若者は、あの独特な言い方に合わせて笑わんと仲間に入れて貰えへん」…。

「今の漫才は、ユーモアのある楽しい会話とか、愉快的な人柄ではなく、ののしり合い、叩き合うのを見て喜ぶもの。ドギツイ言葉や奇抜で大袈裟なアクションが売り」という。

町に公共心が少なくなり失礼な人が多い。立派な年齢と思われる人が、街頭で大声を張り上げて喧嘩するのを何度も見たが、漫才の真似だったのだろうか？

俳句と川柳

(奈良の昨今風景：奈良新聞ほかより)

田水沸く 父祖伝来の千枚田 信徒らも交じり大仏お身拭い
大紅彩 中宮寺跡を示しつつ 百僧の読経のごとき蝉しぐれ
海行かば 高円山の太文字 施餓鬼会や 昔マドンナ 腰曲げて
廃校の木造教室 母昼寝 萩咲けり 非運の皇子の住みし跡
盆棚が揃わぬ前に沙弥の僧 過疎なれば 誰も見かけぬ地藏盆
いずこでも同じことだと千の風 山里へ 一人で帰る星月夜
深吉野の秘話に始まる鮎料理 なでしこが案山子となって揃う村
カナカナや 明日も使う鍬洗う 秘仏観る 眼が並び居るポックリ寺
友逝きて「近いうちに」は時限切れ ケーロー(敬老)とせかすな 鰻食いに行こ
超ミニが毛皮の尻尾付けて来る 車中でもキリまで出すんだ 写してよ

6. 近ごろのリコーダー風景



大阪へ出て「大阪ヤマハ」と「三木楽器」さらに京都へ周り三条の「十字屋楽器店」へ寄ってみた。

生駒の人にリコーダーの選択を問われているので、カタログを貰い、売れ筋などを確かめようと思ったのだが、驚いたことにメック、モレンハウエル、ドルメッチ等の西洋の木製リコーダーが揃えられ、ヤマハ店では一人の客が試奏中だった。

係によると「木製リコーダーを求める人が増えて、同好者の会もある。高価なものが好まれる」と。

大阪音大の田村義一さんの「講義と演奏」や山田有恒さんの「リコーダー修理の会」もあり、年配者にリコーダーの輪が広がっているのは嬉しい。

日本にリコーダーが入って来た経緯には諸説があるが、学校現場に登場するのは昭和30年代のこと。提唱した文部省の花村大先生でさえ「知らないことが多かった」と言われるほどで、現場の教師たちも戸惑った。私もその一人。鼓笛隊を組織し音楽と体育の融合と捉えていた。その後、私は「デスク・オルガン」などの鍵盤指導に移っていき、リコーダーと知って再研修を始めたのは昭和47年頃からである。

岐阜の田中先生、長野・太田、新潟・小原。東京では徳山、上杉両先生。札幌は山屋先生。大阪は北山、三木先生。鳥取・山本、原田。兵庫・西。高知・橋本、鹿児島・榊先生。等等々。まだまだいっぱい、全国各地の素晴らしい先生方にお会いして教えを受けた。

小学校唱歌は日本人の心の歌の財産として諸方で歌われている。今やリコーダーも校門を出て「玩具の教育楽器」から「生涯にわたって楽しむ楽器」となりつつあるのだろうか？ 私が苦勞してきたリコーダーとの30年以上の月日。京都では『パイプオルガンと一緒に吹こう』奈良では『オーケストラと合奏しよう』と親子が集まっていた。

安価で優秀な日本のプラスチック製も使ってほしい。子供の「使い古し」で十分。